

仕事が楽しい人 F i l e . 2 9 : 中野修二さん (バーテンダー)



◆自分ができないことをそのままにしているのが辛いこと

「君の瞳に乾杯」

は、モロッコを舞台とした映画カサブランカで、主人公が恋人に発した名台詞です。

この時に、主人公が手にしていたのは、シャンパンカクテル。(だったはず?)

大切な人に、ある思いを伝えたい時。

ある悩みを、友人にじっくり聞いてもらいたい時。

ある事で落ち込み、自分を慰めたい時。

などなどの時にバーに行くと、心が華やいだり、落ち着いたりするものです。

今回の仕事が楽しい人は、人に癒しの場を提供する場のバーを演出する

バーテンダー、中野修二さんに登場していただきます。

中野さんは学生時代、知人からの紹介で、なんとはなくバーでバイトを始めました。

そして、この時に、マッカラン18年に出会います。

はじめてマッカランを飲んだ中野さんは

「こんな旨いものが、この世にあったのか」と、シングルモルトの虜となり、

毎週、バーに通い出しました。

1年間で、400杯から500杯のシングルモルトを飲んだそうです。

このことがきっかけとなり、このアルバイトを続け、中野さんは、大学の卒業年度になっても就活をせずに、このままバーテンダーの職に就きました。

バーテンダーとしてのキャリアを、このバーで順調に重ねてきた中野さんですが、

30歳を目前にして、バーテンダーとしてもう一皮剥けるには、異なる環境に身を置くことが必要じゃないかと思ひ出します。

思い立ったら吉日。

中野さんは、京都で勤めていたバーを卒業し、東京へ移ることを決意します。

先輩にも相談に乗ってもらい、インターネットからも、ここはと思える東京のバーをリストアップして、上京したのでした。

手にしたリストに記載されたバーの数は、20数店舗。

リストの一番目にあった、「ヘルムズデール」というスコティッシュパブを訪ねます。

東京のお店はどんなものかと、“なんとはなく”立ち寄ったところ、

生涯の師匠となる、村澤さんに出会いました。

上京した理由を説明すると、そのまま面接に。

そして、村澤さんから、「コンビニに行って、履歴書買ってきて」と言われるがまま、履歴書を購入し、その場で履歴書を作成し提出。

すると、村澤さんから、

「明日から、うちに来て」と言われ、なんと、上京して最初に訪ねたバーのヘルムズデールに入社してしまいました。

入社後の1年間は、厨房の担当を命じられ、お酒には触らせてもらえなかったそうです。

バーテンダーの道を極めたい中野さんに取って、お酒に関係のない仕事をするのは、辛いことでしたが、「料理の知識もなければバーテンダーとして通用しない」との村澤さんの一言に納得し、食材管理や、仕込みに打ち込みました。

不器用な中野さんは、シフト内の勤務時間だけでは、厨房の仕事を習得しきれませんでした。そこで、勤務のスタート時間は16時からでしたが、毎日14時30分に入店し、力量不足を補いました。

営業時間は朝の6時までだったので、それから締め作業をして帰宅する時刻は午前10時。睡眠時間は、3時間程度の生活が続きました。

中野さんは、言います。

「自分にとっての辛さとは、自分ができないことをそのままにしていること」

「だから、できないことをできるようにするための努力を辛いと思ったことはない」と。

師匠の村澤さんからは、いつも、

「三ツ星ホテルで働いている気で仕事をしろ！」と厳しく指導されたそうです。

「常に一流の技術を身につけながら、気さくにサービスせよ」という意味を込めて。

◆中野さんが大切にするキーワード

人との縁

全てのことは、人との出会いから始まると考えるから。
そして、縁は、自分が行動することで得られるもの。
だから、いろんな分野で活躍している人に関心を持ち、人と出会える場には積極的に足を運ぶようにしています。

◆中尾さんのパワー〇〇

いろんな分野で活躍する、プロフェッショナルな人たちとの出会い
「大切にするキーワード」と直結しますが、あることを目指して突き進んでいる人からは、大きなエネルギーを与えられます

◆中野さんのコツコツ

NHKのラジオ英会話講座を、1週間に4回から5回聴くこと。
昨年ソムリエの資格を取ったので、1週間に1本のワインを飲むこと。
その他多数。

◆平堀が感じ取った、中野さんの“頭ではなく、心のなすままに行動する” 才能

中野さんは、
シングルモルトを極めるために、日本のスコティッシュパブを
さらにシングルモルトの源流を知るために、スコットランドへ渡り蔵元を、
ワインのなんたるかを知るためにフランスへ行き、シャトーを、
ビールに目覚めると、東京中のビアパブを、多数訪ね歩いてきました。
また、
全国どこに行っても美味しいものが食べられるように、マイ食べログファイルを作ったり、
学生時代インドでバッグパッキングをすると、インドの楽器タブラーにはまり、ガンジス
河の辺に2週間住み着き、演奏を習ったり、
歌舞伎に精通したお客様が集まる店に勤務すると、毎月歌舞伎を観劇し続けたりと、
とにかくよくもまあ、あらゆる分野に好奇心を持ち、その探求に打ち込めるものだと、感
心してしまいました。

中野さんには、これだけの知識と経験があるにも関わらず、話をされていて、
気取りとか、自慢げな雰囲気はまったくない方なので、自然に話が弾みます。
まさに、師匠の村澤さんからの教えである、
「常に一流の技術を身につけながら、気さくにサービスせよ」
を、実践されていて、清々しい印象を持ちました。

中野さんに、どんな時に仕事のやりがいを感じますかと尋ねると

「お客様に、ここに来てよかったなと言っていた時」

「本当に楽しそうに仕事しているねと言われた時」

と答えてくれました。

と、次の瞬間、「これだ！」と、何か大切なものを見つけたような目になり、

「お客様に自分の名前を呼ばれた時が、最も嬉しいですかね」

と教えてくれました。

「中野さん」とか、

「修二君」とか、

「修ちゃん」というように、

顧客から、名前で呼ばれるために、コツコツと努力を重ねる。

こんなにも単純で明快な動機で、新しいことに取り組む。

努力をするのに、理由なんていない。

関心のアンテナが立った時に、動いてみる。

頭ではなく、心のなすままに行動する。

という、中野さんの純粹さは、ある種の才能だと言えます。

私も歌舞伎を何回か観たことがあり、不謹慎にも、眠気と戦った経験があるので、

中野さんに、「最初から、歌舞伎を面白いと思えたのですか」と聞いてみました。

すると、「いや〜、半年位は、どこが面白いのかわかりませんでした」と。

私は、「それなのに、よく毎月、歌舞伎の観劇に通えましたね」と返しました。

中野さんは、笑いながら

「だって、歌舞伎を面白いと言っている人たちが私の目の前にいるんですから、その話題の中に入りたくないじゃないですか」

「だから、面白いと思えないまま歌舞伎の観劇をあきらめてしまったら、つまらないですよ」と、さらっと言ってのけました。

ある人が面白いと言っているのなら、それは、きっと面白いに違いないと信じ、

面白さがわかるまで続けてみる。

これはまさに、面白さを極める王道なのでしょうが、

私のような並みの人間には、真似のできないことです。

中野さんの、“頭ではなく、心のなすまま行動する”才能に圧倒されて、

インタビューを終えました。

◆中野さんのプロフィール

職業：バーテンダー

所属：ヘルムズデール (<http://www.helmsdale-fc.com/info.html>)

◆バーテンダーとは？

(13歳からのハローワーク公式サイトに掲載されている村上龍氏の解説を抜粋しました)
カウンターをはさみ、注文に応じて、客の前でカクテルなどの飲み物を作る。いかに客をもてなすかが、バーテンダーの腕の見せどころ。したがって世界の酒やカクテルなどの知識だけでなく、一般教養や客の嗜好を想像する力が必要とされる。バーテンダーになるには、歴史と信用のあるバーで見習として働くのがいい。容姿はあまり関係なく、むしろ人をひきつける魅力が必要とされる。ソムリエや調理師の資格もあるにこしたことはない。バーテンダーは自分で道を切り開いていく職業で、努力すれば自分の店を持つことも可能。馴染み客のツケも多いので、経営の才覚も必要とされる。資格はないが、技能のレベルアップを図るために、日本バーテンダー協会が「全国バーテンダー技能競技大会」を開いている。

◆バーテンダーに求められる能力

知識：あらゆる顧客の関心事に対応できるだけの幅広い知識

探究心：知識を上っ面なものにしないための研究者のような追究力、行動力

洞察力：顧客自身が認識していない嗜好性を引き出す力

創造力：レシピに囚われない、より優れた旨みを開発する力

如才無さ：気取りのない人間性（どんな人とでも話が弾むとつきやすさ）